



小説 Tarota

挿絵 甘野 氷



小説 : Tarota

挿絵 : 甘野氷

登場人物紹介

Characters



やぎさき とよはる 八木崎 豊春	…	外見は爽やか！でも性欲旺盛な主人公
まつばら だんきち 松原 段吉	…	主人公の悪友
うめさと あいこ 梅郷 愛子	…	主人公とは恋人未満でも肉体関係あり
うしじま ふじの 牛島 藤乃	…	美術部所属で隠れた趣味が
せらだ たけし 世良田 剛志	…	無骨な剣道部員。藤乃にこっそりラブ
はなさき ひめみ 花崎 姫美	…	女子テニス部のエース
ゆりおか ちとせ 百合丘 千歳	…	姫美を慕っている少女。風紀委員
さかい みつお 坂井 益雄	…	線の細い眼鏡男子。特殊サイエンス部部长
とね うんが 刀根 運牙	…	小太りな特殊サイエンス部員
せんげん ななこ 浅源 奈々子	…	美人女教師
たかやなぎ わつみ 高柳 睦美	…	保健の先生

あ	あ	あ	あ	あ	あ
と	と	と	と	と	と
が	が	が	が	が	が
き	き	き	き	き	き
第一章	第二章	第三章	第四章	第五章	あとがき
オレガオマエデオマエガオレDAY	俺と彼女のS○X	波紋は広がって止まるところを知らない	身体は天下の回りMONO	とある特殊サイエンス部の霊流GUN道	
0	0	0	0	0	
0	4	8	2	7	9
6	4	8	6	0	9

第一章 オレガオマエデオマエガオレDAY

照りつける太陽の暴力は目を追う毎に威力を増していき、地上を這い回る人間達の水分を搾取し肌を痛めつけるのに余念が無い。そんな圧制に対して『青春の汗』だとか大層な冠で飾り立てて運動に励むなんて良くやるもんだと、やっていない側から見れば思うのかもしれない。窓外に広がるグラウンドでの光景に、同じような感想を低次元の言葉で抱いてボンヤリと眺める視線があった。

(この暑いでよくもまあ……)

制服の白い半袖シャツのボタンをいくつか外し、胸元を大きく開いて頬杖をついた男子生徒が眠そうな瞳を漂わせている。校舎の三階からの眺めでは美しく飛び散る汗も躍動する肉体も詳細に見る事が出来ず、故に女子生徒達を鑑賞しようにも堪能とは程遠いので、もどかさから穿った見方へとなっているのかもしれない。

「八木崎くん。何か面白い景色でも見えるのかな？」

苛立ち混じりのハイトーンが八木崎と呼ばれた男子生徒の耳に突き刺さる。ビクリと身体を震わせてから振り返れば、教科書を片手にした女性教諭が切れ長の瞳に冷徹な光を宿している。

「あつ……いえ……特に面白いものは……」

慌てて姿勢を正す出来の悪い生徒に、女性教諭は溜息を一つ吐き出すと赤い唇を開いて言葉をつぎ出した。

「それじゃあ、ちゃんと先生の方を見て、しっかりと授業内容を頭に入れなさい！ でないと夏休みが無くなるまで補習を繰り返す事になるわよ！」

室内にいる十数人の生徒達から忍び笑いの声が漏れ出す。隣席の女生徒からの「豊春ださ……」なんていう小声も混じっている。八木崎豊春（やぎさき とよはる）は一瞬だけムっとした表情を作ったものの「はい。解りました」と口先だけは従順に、けれども心の中では舌を出しながら返答した。

ご覧の通り教室で行われているのは成績不良者に対する補習授業という訳で、本来ならば長期休暇で遊び呆けているのに学園に来させられ、普段から身の入っていない勉学に勤しむ行為を強要されて面白いと感じる筈もなく、だらけてしまうのは仕方が無いだろう。

(先生を見ろって言うのならよ……)

豊春は頬杖ついた顔を教壇の方へと固定し、教師の一挙手一投足を余すところ無く観察する。小言は多少五月蠅いものの、整った顔立ちの艶やかな紅い唇から紡がれる言葉は凜とした響きで、内容ではなく音階に焦点を置いて聞けば男の脳を蕩かすような妙な調べに聞こえてくる。黒のタイトスカートから覗く脚は適度に細く、白いブラウスを押し上げる膨らみは豊かであり、観察してみれば歩くたびに振動しているような錯覚に捕らわれる。

(やっぱ奈々子先生の肉体はそそのせ……)

言われた事の前半部分のみを拡大して実行する豊春の思考は更にエスカレートしていき、服の上という現実から中身という妄想の領域へと深化していった。大人の下着といえは黒のスケスケを真っ先に思い浮かべるやりたい盛りの欲望は、教科書を読み上げる女教師を裸にひん剥き、あられもない下着姿で扇情的に腰と胸を揺らせてこちらに迫ってくる画となって再生される。

「八木崎くうくん。次は別の勉強をしましょうね！」

牝の匂い纏わせた奈々子先生が艶かしい仕草で豊春に甘い吐息を投げ掛ける。

「男と女の勉強よ……手伝ってくれるわよね……」

細く滑らかな指先で顎先を持ち上げると、微笑んだ口元を近づけていく。重なるのを期待するように軽く目を瞑るが唇に触れたのは、お預けを表すマニキュアに彩られた細い指先だ。ついと押し返すと、奈々子先生は挑発するように反転させた指先をクイクイと引きつ戻しつさせる。誘われるように豊春の身体はフラフラと教室の前へと脚を運び、教壇を背に預けて待ち構える教師と対峙した。

「ほら……触ってえ〜」

甘い言葉に誘惑するも、流石に人目が集中しすぎている状態では動かせずにいる豊春の手を、痺れを切らせた奈々子は強引に手繰り寄せて自らの柔らかな肢体へと導く。もっちりとし

た瑞々しい感触が掌一杯に広がって脳を焦がし、気がつくくと豊春は夢中になって指や手を動かして至極の肉体を味わっていた。

「あはあくん……いいわよお〜！それじゃあ次は……アソコに……お願いね！」

いつの間にか下着を脱ぎ去り見事な肉体を晒した奈々子は、片脚を膝立ちにして股間の茂みを指で押し広げていた。

「ほらあくみんなにお手本よお〜予習はバッチリなんでしょ？これからひと夏の経験を済ませようという生徒達の手本となるように、正しいセックスの授業を・し・ま・しよ〜」

抗い難い据え膳の誘惑に脳内の回路は完全に焼き切れて、人目があるとか無いとかはどうでも良くなり、いや寧ろ見せ付けてやるうじゃねえかという勢いで、豊春はズボンを脱ぐと教壇に身体を預けた奈々子先生の秘所へと突撃を開始し……

ポコンと小気味良い音が頭上で炸裂する。途端にピンク色の光景は霧散し、怒った顔の女教師と堪え切れない周りの嘲笑とが豊春に集中していた。

「あえ？」

「あえ……じゃありません！」

先程まで淫靡な表情で豊春を見つめていた奈々子は、怒りに満ちた眼差しで湯気も立ち昇らんばかりの仁王立ちだ。

「夢？」

「はあ〜」

豊春の呟きに奈々子の盛大な溜息の音が重なり、教室に忍び笑いの音が再度響いた。

「いやあ〜豊っち、気持ちには解るけど、いくらなんでもありやねえって」

補習授業が終わってすぐに、後ろの席に座る男子生徒が豊春に声を掛けてきた。

「そんなに凄まじくエロイ夢だったのかよお〜。寝言で『グヒヒヒ…』って唸るは涎垂れてるは……」

「何い…そんな解り易かったのかよ……くそ……直前に奈々子ちゃんがワタシを見てとか言うからよお〜」

「うわあ〜豊春さあ……溜まってんじゃないの？抜いてあげよつか？」

右隣の女子生徒も話の輪に加わってきた。

「うわ……愛ちゃんさあ……俺も混ぜてよお〜」

「だんきっちはいいのお！ワタシは豊春にモーション掛けてんじやん！」

当の本人である豊春を尻目に二人はじゃれ合うようなやり取りを続ける。それは最早『お決まり』と称されるレベルのもので、適度に落ち着くまで豊春は黙ってボンヤリと眺めてやり過ごす事になっている。

「なっ！豊っち、いいだろ？」

いきなり問われて豊春は目を点にする。目の前で繰り広げられていた会話を受け流すのに専念していたから当然だろう。こんなにも彼らには日常茶飯事だから「うわっ聞いてろよ」などというツツコミも最早介在せず、替わりに溜息と同時に要約を口にするだけだ。

「これからカラオケ行こうぜ！って話だよ」

「行こおよお〜豊春う〜新曲入ってるよ☆」

二人の悪友が仲良く笑顔を向けてくるのを見て、豊春は微笑しつつ肯定の言葉を返そうとするのだが、それが叶う事はなかった。第四の人物が言葉を被せてきたからだ。

「八木崎君、さっきの事でお話があります」

三人は首をギクシヤクと動かしながら、振り返るまでもなく声で解る奈々子先生に強張ったままの会釈を返した。

もあつと立ち込める熱気が全身に絡みつき豊春の顔を歪ませる。辟易するのは外気だけではなく、手に持ったゴミ入れの重さだ。

「何で俺がこんな事を……」

呟くのは自問の為ではなく単なる愚痴だ。奈々子先生からたっぷりとお小言を振舞われた末に、罰という名だが要するに雑用である職員室のゴミ捨てを実行中で、自業自得なのだが当然

面白い筈もなく、校舎から外れた場所への道程は自ずと愚痴りながらとなる。

「んしょつと……」

焼却ゴミと書かれたエリアへ中身をぶちまければ、沸き立つ特定不明の悪臭に鼻を背ける。

「つたく……箱を戻すのかつたるいなあ……」

薄く引き延ばしてあるとはいえ鉄材で作られたゴミ箱は空になってもそれなりの重量があるし、職員室まで引き返す行程も面倒だ。だからつい『このまま捨てちまうか』などと黒い思念が浮かび上がり、意識が自然と不燃物ゴミのエリアへと向かう。すると豊春の聴覚はガシヤガシヤと物がぶつかる音を察知し、視線がエリア内で揺れる細い影を発見した。シルエットからして女子生徒である事は間違いない。大方、部活動などで生じたゴミを処分してきたといった感じであろうか。

（これはチャンスか？とりあえず手伝って、そしたら好感度がアップして……相手によっては色々……むふふ……）

邪な打算が豊春の両脚を動かしていく。不燃物を処分するエリアの前では後姿の女子生徒がヨロメキながら歩いていて、ガシヤンと重量感のある音を立てて箱を置くところであった。半袖のブラウスや紺色のスカートから覗くのは余り焼けていない綺麗な肌で、華奢な体つきや長い黒髪から判断しても文科系クラブだと推察できる。

（中々イ感じの後姿じゃないか！これは期待できそうぞ！）

心の中で涎を垂らせながら、豊春は精一杯に作った爽やかな声で呼びかける。

「やあ！大変そうですねえ！手伝いましょうか？」

振り返る一瞬はドキドキとするものだ。期待と不安が豊春の中を駆け巡る。

そして……

「うへえ！？」

相手の顔を見て豊春の顔が凍りつく。女子生徒の方もしかめっ面で「はあく」っと重い息を吐き出した。

「なんで……休み中にこんな処に居んだよ！」

機先を制して豊春が毒づくが、相手も負けてはいられないように……

「部活よ、部活！美術部って結構色いろなゴミが出んのよ！それより今のセリフは私の側からぶつけないものね！」

「俺は……あれだよ……ほら……勉強大好きだからさ……夏休み中も学びに来たって訳さ！」

「単なる補習授業でしょ！相変わらず格好ばっかりつけちゃってさ……」

女子生徒は言葉を終わると長い黒髪を翻し、足下の箱から中身を拾い上げては不燃物のエリアへと投げ込んでいく。

「こっちは、これでも忙しいんですからね！ナンパ目的のチャラ男君は繁華街にでも繰り出して下さいねえ！」

言葉に一瞬ムっとするものの、考えてみれば牛島藤乃（うしじま ふじの）とは出会いの時間もそうだった。切り揃えられた前髪から覗く濃い睫毛の目元からは清楚な風が吹いていて、整った顔立ちに流れる黒髪と儂げな雰囲気に惹かれる男子は多く、豊春として例外ではなかった。同じクラスになって一週間以内には触手を伸ばす多くの生徒達と行動を共にし、同じように撃沈されたのだった。その時も「ナンパはお断りです、余所でやって下さい」などと言われたのを思い返す。

それでも諦めずというか懲りずというか、アレコレと口実をつけて豊春は藤乃に話し掛けてみるのだが、返されるのは冷たい言葉ばかりである。そうして沈みこまれた結果が、顔を見れば浮かび上がるのは恋心ではなく苦手意識へと変わったのだった。

（くそ……夏休みにワザワザ学園に来て罰を受けた上に嫌味言われて散々だぜ……）

心の中で毒づいていると、せめてコイツからだけでも見返させてえ……と良く解らないが豊春の思考はそんな思いに捕らわれていた。

「な……何？」

背後から近づく男の影に藤乃は一瞬ビクリと身体を揺らせる。普段から人通りの少ない場所は休みともなれば尚更で、エロイ事にしか頭を働かせない男に対する警戒心としては至極当然だろう。けれども身を硬くする藤乃に、豊春の口から本当に意外な言葉が返ってきた。

「手伝ってやるよ……」

「はあ？別にこれ位なら一人でも平気よ」

戸惑う藤乃の手が止まった一瞬に、地面に置いた重たいゴミの箱が持ち上げられる。流石に軽々とはいかないまでも、力の違いを見せ付けられてドキッと胸の裡が揺れ動いたのは確かだ。

「最初に手伝うって言っちゃったからな……筋を通しておこうと思ってな。それに俺なら一瞬で終らせられるしよ！」

豊春は持ち上げた箱を揺らせて勢いをつけると一気に中身をぶちまけた。作りかけの彫像やら粘土の破片に小さな古いキャンバスなどが一斉に飛び出し、体積しているゴミの山へとぶつかりガシャガシャと耳障りな音を立てる。同時に埃が舞い上がり二人の喉を刺激した。

「（ほっ）（ほっ）……手伝ってくれるのは嬉しいけど……雑よねえ……」

「（ほっ）……いいだろ……この方が早えんだし……」

目に入ったチリを拭いながら悪態の聲に答えると、見開いた豊春の眼にゴミを放り投げた結果が飛び込んできた。一部か崩れたにしても夥しいガラクタが流れてしまっている。その中にある、丁度目を向けていた先に転がるモノが豊春の気を惹いた。

拳銃に見えるそれを拾い上げると、ヒンヤリと冷たい金属の感触が掌に伝わる。ズシリとした重さ、グリッブについた引鉄とまるで本物のようではあるが、恐る恐ると銃口を覗いてみればガラスと思しき透明な素材で潰されている。ゲームで使う光線銃なのだろうか？コード

が無いところを見ればハードにつながるデバイスではなく、単体で遊ぶ玩具なのかもしれない。よく見ればスライド部分にダイオードのような緑の光が灯っている。

「ちよっとおゝ何よそれえ……まさか本物？」

眼に入ったゴミの処理と、服に纏わり付いた埃を払っていた藤乃が、物騒な光景に驚いて口を開いた。

「んな訳ねえだろ……玩具だよ玩具あ」

手にした銃を振りかざしてみれば、藤乃は反射的に怯える。

「こっちには向けないでよね！」

「ん？じゃあ自分に向けたらいいか？」

豊春はおもむろに銃口を自分の頭部へと当てる。コメカミから冷たい感触が伝わってきた。

「ちよっと……いくら玩具だからって……当たったら痛いわよ……」

「平気だって光線銃タイプみたいだって確認したから」

「だからって、そんなの……ロシアンルーレットでも気取ってるつもり？」

「違えーよ。こんな風に自分に銃口向けて特殊能力を発動させるのがあんだよ」

「そんなゲームのごっこ遊びなんて……バカじゃないの!？」

「何だよ！いいだろ別に!」

反射的に力つとなつて拳を握り締めれば、それはトリガーに掛けた指も動かす事になり、思っ

たよりも少ない抵抗でカチリという軽い音が豊春の耳元で響く。それは正に運命のトリガーを引いた瞬間であった。

(効果音が鳴ると思ったけど何もねえなあ……)

そう思った瞬間に、想像もしないような衝撃が豊春を襲った。脳が直接揺さぶられるような感覚と、意識が乖離していく錯覚だ。

(なんだ……これ……)

突然の睡魔に陥るように意識が途切れる。

「ちよっと……」

コメカミに銃を当てる豊春が急に眼を白黒させたのを見て藤乃は戸惑った。音など鳴らなかつたものの、本当に頭を打ち抜いたんじゃないかという心配だ。駆け寄ろうと一步を踏み出そうとして、藤乃も同じような脳を揺らすような衝撃が襲ってきた。

「なに……これ……」

何かが頭に沁みこんでくるかのような感覚に生理的な嫌悪が立ち込めるが、未知の力には抵抗出来る訳ではない。藤乃も豊春と同じように、不意の睡魔に襲われたが如く意識を途切らせた。

けれども二人の意識が空白だったのは僅かに一瞬の出来事であった。クラッと揺れる身体を無意識に動く脚がしっかりと踏み留める。

（何だぁ……今の感覚は……）

豊春は頭を振って意識を覚醒させようとする。しかし、動作に伴う感覚は明らかに以前とは異なっていて、抵抗が大きく顔の周りに纏わりつくようなのだ。おまけに鼻腔を擦るように、甘い香りが感じられる。

恐る恐ると異変の源である頭上に手を当てれば、短い髪の毛のゴワツとした感触ではなく、柔らかく耳まで隠す長い髪に当る。ガシッと髪の毛の束を掴んでみれば、長い髪が自分の頭から伸びていることを実感する。

（なんだ……これ……まさか、さっきの銃の効果か！？）

頭に向けて撃ったから髪が伸びたと推測したのでろう。けれども下ろす際に視界を掠めた手が、変化がそれだけではない事を豊春に知らせた。白く華奢な造りの掌と腕は、明らかに自分の物ではない。

「どうなって……」

唇から零れた声も聞き慣れたものとは違う柔らかな響きの音で、慌てて口に手を当てれば触り心地までも今までと違う。愕然となった項垂れると、豊春の眼下に広がっていたのは紺色のスカートとそこから伸びる脚で、剥き出しの肌の色も形も靴も何もかもが違っていた。確かめようと咄嗟にスカートを掴んでみれば、脚に擦れる布地の感覚が履いている事実を豊春に突きつけてきた。

（何でこんな……女の格好を……）

スカートや髪に、肌の色や声までも変化した。さっきの銃は一瞬で女装させる為のドッキリアイテムなのだろう。無理があると思いつつも豊春はそんな一縷の望みに縋ろうとしたが、崩れ去るのに時間を要さなかった。

「あああぁ〜！」

素っ頓狂な男の声が近くで爆発したのだ。何事かと向き直れば、見覚えのある男子生徒が目の前で豊春を指差している。

「あんた……私じゃないの!？」

見覚えのある男の言葉に豊春の思考が一時停止をする。私って何だ？俺に向かって言ってるのか？ってどうか、お前は誰だ？様々な疑問符が一気に沸き上がり、そして唐突に爆発する。

「あー！お前は俺え〜！」

豊春の口から素っ頓狂で甲高い声が響いた。

不燃物のゴミ捨て場という凡そ浪漫な欠片も芽生えそうな場所で、男女が慌てたように駆け寄って互いの姿をマジマジと観察しては手で触れる。

「私って言葉使う俺っぽい姿をした、お前誰だよ……」

「私は牛島藤乃よ……あんたの方こそ誰よ!」

「俺は八木崎豊春だ」

藤乃を名乗る男子生徒の頬がビクビクと動く。

「なんで、あんたが私の姿してんのよぉ〜」

「知るかよ！お前だって俺の姿で女言葉を使うなよ気持ち悪いだろ！」

ムっとしながら豊春は無造作に腕を組んだ。するとそこには、微かにだが確実な柔らかさが存在していて手の甲を押し返す。

「ん？」

反射的に腕を蠢かせて胸を確認すれば、フニフニとした感触が楽しく夢中で行為を繰り返す。

「ちよっとお〜！何してんの！」

「いや……今までこんな無かったからさ……気になって……それにしてもこれがお前の膨らみだとすると……随分とその……少ないよな……」

声にならない男の雄叫びがゴミの山を揺らせた気がした。咆哮を終ると豊春の姿をしている藤乃は、自分の腕を取って強制的に気をつけの姿勢を取らせる。

「痛えなあ〜馬鹿力出すなよ！」

豊春の抗議を聞いていないように、藤乃は自分に宿っている力強さを確かめるように手を閉じたり開いたりしている。けれど浸る気持ちを一瞬で切り替えて、藤乃は改めて自分の姿に向き直ると口を開いた。

「……とにかく……この異常事態を何とかしましょう！」

「何とかって言ってもよぉ〜こんな非常識なのどうすんだよ……」

原因、それはもう追求するまでも無く怪しいアイテムが今の藤乃の手にあった。

「これの所為じゃないの？」

威嚇射撃でもするかのように銃の形をした玩具を頭上に上げる。

「これを撃つたからこうなった……のよね？」

「ん……ああ……そうかもな……けど本当にそんなので……」

豊春の言葉を最後まで聞かずに、藤乃は思い切って引鉄部分を握り締める。カチャッと小さな音はするのだが、さっきみたいに異様な感覚が襲ってこない。

「え？嘘……ほら……」

何度かカチカチと連発してみるが効果は一向に現れない。何か違いがあるのだろうかと考えれば、さっき撃つたのは体こそ違えど豊春であった。無言で銃を渡されたので受け取るが、豊春の柔腕には少々重かったようでつい両手を使わざるを得ない。

（なんだこれ……こんな重かったっけ……）

体の違いを感じながら促されるままに銃を操作するのだが、結果はやはり何も起きないというものだった。失敗に肩を落とす藤乃を尻目に、豊春は両手で抱えた銃をマジマジと確認する。「あれ？」

「何か解ったの？」

明るい表情で覗きこんでくる自分の顔に何だか生理的嫌悪を覚えて、豊春は一步身を引いてから銃を差し出して説明する。

「こんなところに黒い窓があるじゃん」

本来の銃ならば弾倉から発射装置へと弾を供給するためにスライドする部分を指差す。細い指の示す先には確かに小さな枠がある。

「これ、さっきは緑色に光ってたんだよ……」

「え？じゃあ電池切れってこと？」

銃を取上げてあちこち見回すが、一番ありそうな弾倉部分は外れないし、スライド部分も動かないときている。

「もう！どうなってるの！？」

「解らねえけど……今は戻るの無理って事じゃねえか？」

「どうすればいいのよ……」

途方に暮れても解決策は他に思いつく訳もないし、対応策も限られている。体が入れ替わっているというならば、それに従って生活も取り替えるしかないだろう。人は見た目で判断する生き物だし、ドラマとか漫画とかフィクションの世界に於いても結局はそれ以外になかったのだし……

結論が出たのならば行動を起こすしかない。二人はとりあえずゴミ捨て場を後にした。

夕焼けが支配する空の下を学生服姿の男女が並んで歩いている。傍から見れば学生カッブルに見えるかもしれない。けれども会話に耳をそばだてたり、挙動を観察してみれば何かが変わった気がする。

「ちよっと……大腿で歩かないでって、何回言えば解るの？」

「そっちこそ両手で鞆持ってナヨナヨって感じに歩くなよ！」

囁き声の会話は万事こんな感じで帰路の分岐点まで続いて行く。

「いい？必要以上に身体に触ったり、変な事とかしないでよ！」

藤乃は何度も打ち付けてる釘を最後にもう一押しする。

「こんな貧相なの触んねえよ！そっちこそ俺の大事な息子にヨロシクな！あと言葉遣いに気をつけるよ！」

「そっちこそ気をつけてよね！あと、いつでも連絡いれるからね！」

自分の体が遠ざかっていくのを見送ると、藤乃の胸に不安は一層広がっていくが、いつまでも路上でボーっとしている訳にもいかない。雑に記された地図を手に藤乃は新たな一歩を踏み出した。最初は心情を代弁するかのように別れる前と同じくトボトボとした歩調であった

が、次第に脚力の違いが生み出す力強さの虜となっていき、気がつけば直線を早歩きで進んでいた。

(こんなにスピードが出るなんて……結構楽しいかも……)

思ったよりも早く『八木崎』という表札の踊る、見知らぬ自宅に到着した。ドキドキしながら玄関に手を掛けるが施錠されていたので、本人に教わった通りにポケットのサイフから鍵を取り出して内部に潜入する。静まり返る屋内は嗅ぎ慣れぬ匂いに包まれている。メモを参考に階段を上がり部屋へと辿りつくと、夏の室温で蒸されて凝縮された男の臭いが藤乃の鼻を襲った。部屋の明かりを点けるとすかさず窓へと駆け寄り換気する。

「けほっ……けほっ。もう……酷い匂いに……汚い部屋ね……」

脱ぎっぱなしの室内着や読みかけの雑誌など色々な物が室内に散乱していて、ざっと見渡した藤乃の眉を蹙めさせるが、その中からコントローラーの放り出されたゲーム機に視線が留まり、ゆっくりと近づくと本体の上にはだらしなく放置された開いたケースを手にとった。

(やっぱりこのゲームか……)

現代を舞台にした伝奇的な設定のロールプレイングゲームで、入れ替わる直前に豊春が話題に触れていたやつだ。藤乃も実は登場キャラクターに興味があったのだが、生憎とゲーム機を所持していないので遊んだ事はなかったのだ。とはいえ、漫画化された方は持っているのだが、やはり原点が知りたかったのである。

ケースを締めつ眇めつした後で早速プレイすると思えばそういう訳でもなく、今度は本棚へと視線を移して収蔵されている漫画をチェックする。

(流石に男子はバトルものの漫画が多いのね……)

長編バトル漫画の一卷を手にとると、ワクワクしながら読み始めた。王道漫画の序盤は息もつかせぬ展開で一気に引き込まれてページを捲くる指が止まらない。気がつくと半分程を読み進み、ほふうと長い息を吐き出して余韻を楽しむ。

(あいつも同じように私の部屋を探るんだろうな……)

何本もピンを刺した位では、行動を制限出来ないのを藤乃も解っていた。こういう非常事態だからこそ相互理解の為に必要だと解っていた。けれどやはり恥ずかしいのだ。何と云っても『乙女の秘密』というやつなのだから。もう一度釘を刺すべく連絡しようと思ったが、とりあえず気になる漫画の続きを読んでからにするのであった。

その頃、いつもと勝手が違う足取りと道程により遅くなったが、豊春も藤乃の部屋へと辿りつき、やはり同じように詮索をしている最中であつた。但し矛先が向いているのは室内内ではなく肉体に関してであつた。

「やつぱ黙って見つめられると可愛いなあ〜」

荷物を適当に放り出しざっと室内を見渡した中から、豊春が最初に取ったのは鏡台に映る姿

を凝視することだった。見慣れた自分の姿の替わりに、流れる黒い長髪の美少女と呼べる風貌が覗き込んでいる。毛嫌いしていた原因である口やかましさも自分でつぐめば解消され、表情も思いのままに変えられるので微笑んだりウイंकしたり膨れっ面なんてのも簡単に見られるのだ。尤も多少の虚しさも感じられるが、得られる報酬と比べても分は悪くない。

そうやって麗しい顔を存分に堪能したならば、次に意識が向かうのは髪の毛に開いてだった。何しろ藤乃の体になってからというもの、ずっと顔の周りに纏わりつく感覚と意外な重さに辟易させられてきた訳だ。

（見ているだけなら美しいって思うだけだなあ……）

長い髪を掻き揚げてみれば、甘い香りと鏡に映る白いうなじとが同時に堪能できる。それに結つてみたらどんな感じかなどシミュレートも出来るのだが、扱い慣れていない豊春に取っては面倒な作業ですぐに諦めてしまった。

それで次に興味が移るのは肉体そのものであった。ブラウスから伸びて散々に動かししていた細い腕を組むようにして触ってみれば、スベスベでプニプニな感触は何度味わっても極上の甘美を豊春に提供してくれるのだ。

（これだけで、こんな感じならば……）

両手をずらして胸へとあてがうと指先を駆使して弄ってみる。一度触ったから小ささは了承していたものの、それでも充分な柔らかさと被接触感とが同時に襲ってくる。

（そういえば……乳首が気持ち良いんだったな……）

女友達との触れ合いの中で学んだ技巧を思い出し、円を描くように軽く胸の先端部分を撫で回してみる。じんわりじんわりと浸透するような感覚で、心地良さが脳を直撃していく。

「んふううう……」

口から零れる甘い吐息に豊春の心はドキリと跳ね上がる。憎らしいと思うまでになっていた藤乃の可愛い喘ぎ声は、男心を蕩けさせるのに抜群の効果をもたらすのだ。

（ギャルゲとかで生意気な女キヤラを落とす時みたいなの征服感もあるよな……）

鏡の中では切なげな表情の美少女が見つめていて、しかも自分の胸を弄っている。扇情的な動作は明らかな据え膳で喰らいにかなければ男じゃないよな？豊春は両手を下の方へと動かしてスカートを思いつき捲くり上げる。

（白いショーツかあ……基本に忠実だねえ）

大胆にスカートを両手でたくし上げる藤乃の姿は、清楚な外見とのギャップが琴線を震わす。

「本当はエッチな娘なんですよ！」

上目遣いにそんな台詞を言わせてみれば、ますます盛り上がるのだが、結局は自分で口になっているのだから聞える声は可愛らしいとはいえ虚しさが胸に去来する。

「それにしても……」

豊春はパンツの上から股間を押さえる。ホンワリと柔らかな丘に、ペタリと掌が張り付き虚しい喪失感が湧き上がる。

「やっぱ息子がいねーのは寂しい限りだな」

これだけの美味しい餌を前にして、本来ならば一緒に喜びを分かち合える相棒がいらない寂しさもあるが、それどころか興奮する感覚も今ひとつ物足りないのだ。

「まあ替わりに姫様だか観音様だかが居るからな……ちよつと拝んでみようかな」

パンツの淵に手を掛けると、躊躇いも無く一気に脱ぎ去った。鏡の向こうでは普段と変わらない制服姿の藤乃が立っているのだが、スカートの中は丸裸であり、それを知っていると物凄くエロちつくに見える。

「履いて無いとか、ありえないだろ！」

豊春はさつきと同じ要領で思いつきスカートと捲くり上げて、その有り得ない情景を現出させる。ホワホワした若草の如き恥毛に覆われた秘境が顔を覗かせている。

「いやあくん。パンツ履くの忘れてきちやっただろ」

甘い声を作り出してバカっぽい演技をしてみるが、流石に恥ずかしくて後悔した。するとちよつとした事なのに顔色がほんのり紅くなったように見える。成る程、この身体は敏感に反応するみたいだな……とみるや豊春の思考はエッチ方面にも敏感なのか？という発想に飛躍する。

「んじやまあ……ちよつくら……」

無防備となった下半身へと指先を進軍させて、茂みを掻き分けて大地へと降り立つと溝の調査を開始する。指先に触れる柔らかくも独特の弾力を楽しみつつ、触れられているという未知の感覚が豊春に襲いかかる。何度か続けてみるが気持ち良いには程遠い、くすぐたさを感じられるだけだ。中を弄れば良いのを解ってはいるのだが、やはり男としては怖いのだ入れられるという行為は。だから内側を弄る前に溝の付け根に当る部分へと攻撃目標を移した。

「ん……？あえ……？」

ちよこんと突き出した豆状の突起に指を掛けて握ね回してみたのだが、心地良さよりも痛みの方が若干強くて、男よりも遥かに凄じいという前評判を裏切っているではないか。

（何だよ……こんなんじや男の方がマシじゃねえか……）

いつものような張り合いの無さに肩を落とすつつも、豊春は突起を弄る動作を止めずに、少し緩めて撫でるようにして続ける。すると、途端に男の先端を弄っているようなゾワゾワする心地良さが湧き上がってきた。

（お？この加減がいいのか……成る程ねえ……）

楽しくなって行為を続けていけば、どんどんと快感が蓄積されていくようで、それに連れて身体の方にも変化が生じてきた。男の時のような興奮がゆっくりと立ち上がり、それが胸と股間で同時にムズ痒い膨張感覚に繋がった。